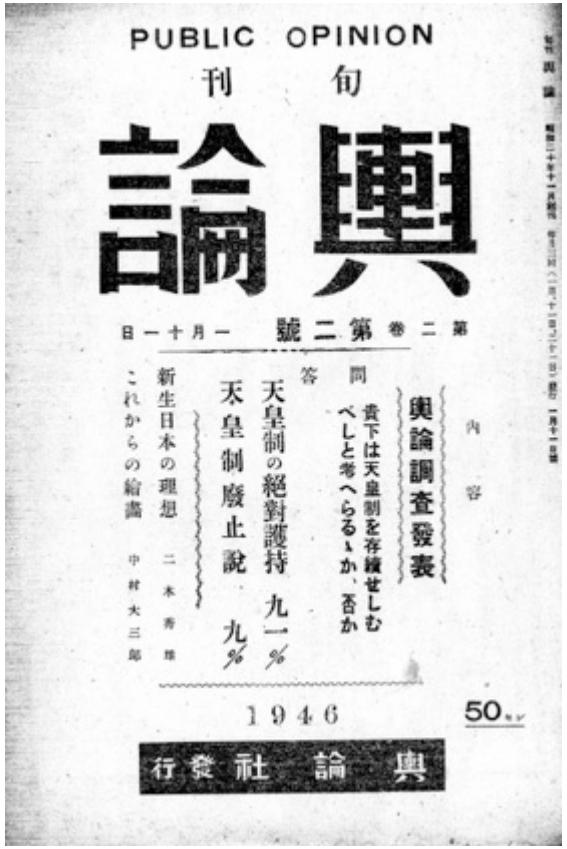
731部隊二木秀雄の免責と復権

——占領期『輿論』『政界ジープ』『医学のとびら』誌から

2015年夏版

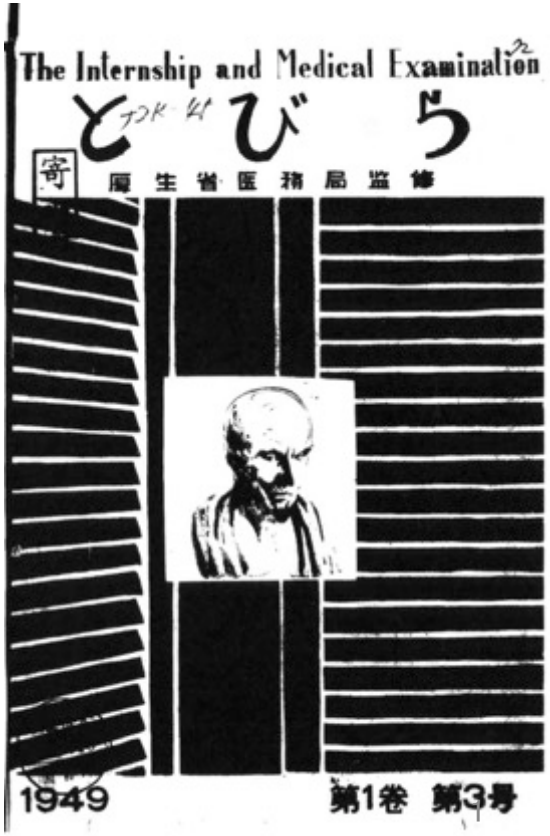
加藤 哲郎（早稲田大学）

1945-46　金沢・輿論社



1946-56 東京・ジープ社

1949-51 ジープ社



方法①クロス・メディア、②731史、③占領・密約・貫戦レジーム（A・ゴードン、テッサ・モリス・スズキ参照）

はじめに―発端はゾルゲ事件、二木秀雄の『政界ジープ』48.10

1　731部隊隠蔽―仮本部「会報」10項目口どめ・名簿作成

2　免責3段階―金沢『輿論』『日本輿論』から『政界ジープ』へ

（1）1945.10 「純科学的調査」「昭和天皇は無関係」

（2）1946.1 「連絡事項」10項目,マルタとペストノミ以外供述

（3）1947.4 「鎌倉会議」9項目、生体データ提供免責密約

3　復権3段階―PHW、伝染病、帝銀事件・朝鮮戦争とジープ社

（1）1949　厚生省医務局『医学のひろば』、性生活展

（2）1950　日本ブラッドバンク、731幹部同窓会「精魂会」代表

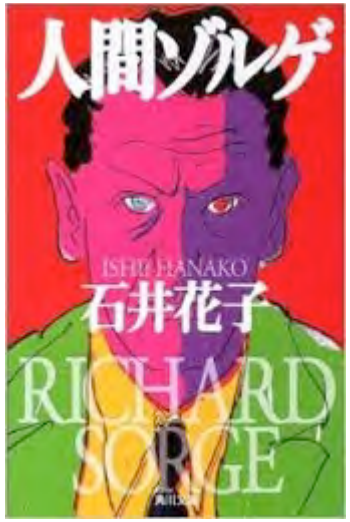
（3）1952　朝鮮戦争と細菌戦のススメ「地球の上に蚤が降る」

4　1956.3　二木秀雄の転落＝内灘闘争と「政界ジープ恐喝事件」

おわりに―81森村『悪魔の飽食』の頃、大乗日本イスラム教団代表

発端：1949.2ウィロビー報告前にゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」と名付けた雑誌『政界ジープ』48.10

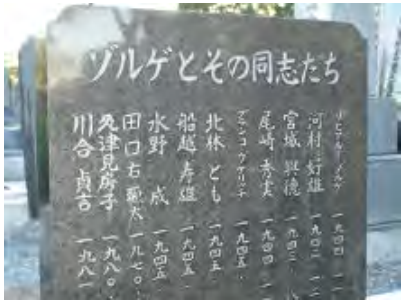
「ゾルゲの遺体がどこにあるのか、どこに埋葬されているのかということは公表されませんでしたし、全然わかりませんでした。ところが、昭和23年の10月だったと思いますが、『政界ジープ』っていう雑誌に“尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相”という記事が出ているのを見つけて買って帰ったんです。…その記事のなかに、ゾルゲの遺体は引き取り手がなくて、拘置所が雑司が谷の共同墓地に土葬して、そこにささやかな木の墓標を立てたというのがあり…」（石井花子）



多磨墓地の5つの墓碑

ゾルゲ、尾崎秀実、同志たち：<u>懇心平等万霊供養塔</u>

（精魂塔、1956.11建立・隊員及び犠牲者の供養、二木寄付146万円・有志5万円、Unit 731 Memorial）、二木秀雄墓



ゾルゲ事件と731部隊の直接的繋がり

（M・クラウゼンの1942年1月5日第11回警察訊問調書『ゾルゲ事件　4』280頁）

「四　1937年　月日不詳　「日本陸軍は戦争に備ふる謀略戦術として「ハル ビン」市又は其の付近に「コレラ」「ペスト」等の細菌研究所を設け盛 に培養 し居れり。右は当時「ゾルゲ」宅で同人と「[ギュンター]シュ タイン」と話して居るのを 聞きましたが、私はその時暗号内容が解らぬ時代でありましたから打電 したか如何かは確実でありません」

→平房完成前の関東軍防疫給水部「加茂部隊」時代、情報源は？　中国共産党？　武藤章ら日本陸軍親独派？　尾崎秀実・満鉄ルート？　安田徳太郎（1924京大医卒）から宮城与徳経由？→シベリア抑留・ハバロフスク裁判に影響か？

二木Futaki秀雄（1908-92)の数奇な生涯

1）金沢医大出身・医学博士、731部隊石井四郎側近、企画課・結核班長で生体実験、敗戦後、金沢731「仮司令部」で石川太刀雄と共に受入参謀格

2）戦後金沢文化の先駆者：1945.11雑誌『輿論』『日本輿論』刊行――天皇制護持と原爆・原子力時代でGHQ接近、鳩山一郎系？

3）右派大衆時局雑誌『政界ジープ』刊行（vs.左派の佐和慶太郎『真相』）

・『経済ジープ』で医薬・機器業界と癒着

・ジープ社社長、厚生省監修・綜合科学研究会『とびら』『医学のとびら』刊行でPHW医療改革、旧731医師再結合

・1949浅草松屋、厚生省・文部省・労働省・日教組後援『若き人々に贈る性生活展』主催、高橋お伝標本展示

4）最盛期1950年

・それまで数冊のジープ社単行本、この年400冊刊行（資金？）

・内藤良一・宮本光一と共に日本ブラッドバンク創設・取締役（→ミドリ十字→薬害エイズ）、株主に石川・太田・野口・星野ら

・731部隊上級幹部同窓会「精魂会」結成・代表、55多磨墓地精魂塔建立

・1953・4ダブル選挙、衆院辻政信にならい、参院選石川地方区（内灘射撃場誘致）選挙立候補・惨敗落選

5）1956戦後最大の恐喝事件「政界ジープ事件」で検挙・転落、69最高裁で懲役3年実刑確定、その間医師・政財界黒幕

6）1974.12 新宿ロイヤルクリニック・日本イスラム教団総裁、国際イスラム会議で石油利権、新宿歌舞伎町顔役

二木秀雄　年譜　1908―92年

wiki http://ja.wikipedia.org/wiki/二木秀雄

墓碑　http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/H/hutaki_hi.html

- 1908（M41）2.10　石川県生　　（人事興信録）
- 1927(S2)　金沢一中（現金沢泉丘高校）34期卒業（同期に浦茂・戦後の航空自衛隊幕僚長）http://www.issen-k.jp/images/334-1.pdf・http://ja.wikipedia.org/wiki/浦茂
- 1929(S4)　金沢・旧制四高理乙卒業
- 1933(S8)　金沢医大（細菌学教室・谷友次門下）卒業、33年4月細菌学教室入室
- http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/2297/3670/1/LE-PR-FURUHATA-T-76.pdf
- 1936/3-37/12　金沢医大細菌学教室講師
- 1938(S13)11.18　「家兎神経系細胞の組織学的研究」で金沢医大・医学博士
- 1938　陸軍技師、陸軍軍医学校
- ？　関東軍731部隊　企画課長
- （榊原秀夫瀋陽供述）
- ？　第一部第11課二木班長（結核・梅毒研究）
- 梅毒人体実験（西野留美子調査）
- 1940「所謂孫呉熱の研究」『軍医団雑誌』327号付録（石井四郎・笠原四郎・石川太刀雄らと共に共著者末尾）
- 1941.4.21　京大を経て金沢医大で石井四郎「日本文化講義」に同行
- 1944.12-45.1　安達でガス壊疽菌人体実験 (ハバロフスク裁判西俊英供述、瀋陽秦正氏供述)
- 1945.8　帰国、金沢野間神社731部隊「仮本部」勤務
- 1945.11　輿論社『輿論』刊行
- 1946.3　輿論社『日本輿論』に改題
- 1946.8　ジープ社『政界ジープ』刊行（―1956）
- 1947.11.15　米軍ヒル報告インタビュー
- 1948.　ジープ社、厚生省医務局『とびら』『医学のとびら』創刊
- 1949　浅草松屋「性生活展」、高橋お伝標本展示、銀座素粒子堂医院開業
- 1950　内藤良一・宮本光一と日本ブラッドバンク（後のミドリ十字）創設、取締役
- 1953.4　参議院選挙石川地方区立候補落選（衆院辻政信、内灘米軍射撃場誘致が争点）
- 1955？　731部隊上級幹部同窓会「精魂会」設立・代表になる
- 1956.3「政界ジープ事件」で検挙、66年求刑懲役6年・69年最高裁判決懲役3年確定
- 1956.8　多磨墓地に731慰霊碑「精魂塔」建立
- 田園調布　二木診療所
- 1974末　新宿ロイヤルクリニック、日本イスラム教団総裁、石油利権でサダム・フセイン等と会見
- 1992.9.18　死去、享年84歳　（墓碑）
- 2012.5　多磨墓地に二木秀雄墓碑建立

731部隊での結核・梅毒班長二木秀雄

四高→金沢医大・医博（梅毒）→陸軍軍医学校→731生体実験

①シェルダン・H・ハリス『死の工場：隠蔽された731部隊』（柏書房、1999）p.126に米軍第4次ヒル報告二木供述、②ハバロフスク裁判西俊英供述、③中国档案館秦正氏供述に生体実験証言、④西野瑠美子によれば二木は梅毒生体実験で慰安婦問題と731の接点、森村誠一の面談に何も語らず（ハル・ゴールド『証言　731部隊の真相』廣済堂文庫、p.180以下）⑤秋元寿恵夫の親友吉田源二は二木班（『医の倫理を問う』）、⑥ 41.4日野原重明の見た生体実験フィルム
⑦榊原秀夫供述「二木は前企画部長、非常な活動家、相当勢力ある男」（滝谷本）

二木秀雄博士は、結核についての彼の実験に関して報告するなかで以下のように記している。カルメットバチルス（BCG）を扱った人体実験においては、「すべての実験体が回復をみた」が、ヒト型結核菌を扱った試験においては、「すべての投薬が薬粒結核症をひき起こし、一〇・〇ミリグラムおよび一・〇ミリグラム注射された被験者については一か月以内に死にいたり、他の者も重病になり前者より長くは生きたものの、後におそらく死んでいる」。別の試験では、「〔薬剤の〕注入後直ちに熱を伴った激しい症状が現れ、その後一か月で死に至っている」。二木は、満州の子どもたちを使って実験し、陽性のツベルクリン効果を達成している。彼は、結核病原菌の「オリジナル・ストック」を「自然の状態」から採取した――「病毒性は、人体実験材料に感染させることで保存された」。二木秀雄博士の実験は、結核が細菌戦の戦略としては効果的なものでないだけに特にぞっとするものである。通常、結核は効いてくるのがゆっくりすぎて、細菌兵器に求められる効果的なインパクトを得ることができなかった。それゆえこれらの実験は、純粋に学問的な目的で、被験者たちの命を犠牲にして行われたと結論づけるのが合理的である。

秦正氏自筆供述書（一九五四年九月七日）中国中央播案館ニ託ス人体実験

一九四四年一二月頃、北野政次隊長、第二部部長樋口軍医大佐の指揮のもと、安達実験場で六名ほどの愛国者（うち少なくとも一名はソ連人）を足枷をつけたまま、運んできた車から下ろし、後ろ手にして約二〇メートル間隔の木柱に縛りつけて、地面にひざまづかせた。飛行機が一〇〇ないし二〇〇メートルの高さから炭疽菌の細菌弾を投下し、細菌弾の爆発とともに、純粋培養された炭疽菌が散布された。これら愛国者の身、眼の粘膜をおそった。研究会でみた映画によって知った。数日後、診療部長の永山太郎軍医大佐が、炭疽に感染した愛国者にきまざまな「治療」をおこなった結果、ついに死亡させた。私が翻訳した「炭疽の二例」のなかの治療法は、永山によって実験に使われた。

一九四四年一二月頃、私はソ連医学の「ガス壊疽治療法確定」ほかガス壊疽の治療にかんする文献約三篇を訳介し、第二部の二木技師に以下のような残忍な実験をおこなうようそそのかした。すなわち、二木は私が翻訳した文献を基礎資料として、菌の毒力を高める研究をおこなった。「九四四年一二月頃、一名の中国愛国者の大腿部内面の局部を切り開き、切り口の「方」にガス壊疽菌を接種し、もう一方にガス壊疽菌と土砂の混合物を接種して、二カ所の発病状態を比較する研究をおこなった結果、土砂を混ぜることによってガス壊疽菌の毒力が強まることを確認したのである。被実験者の身体は大きく腫れあがり、壊疽の症状に陥った。このあと外科の切開手術はかきまざまな「治療」を施した結果、ついにこれを死亡させた。死体は診療部の所軍医中尉が病理解剖した。

一九四五年一月頃、第一部軍医少佐高橋正彦は三名の愛国者にペスト菌を注射し、重症の腺ペストと肺ペストに感染させたのち、日本製のサルファ剤を使用して「治療」をおこない、結局死亡させた。一九四五年一月頃、第二部吉村班の武藤技師は、中国愛国者一名に大量の食塩を服用させたのち、毎日若干量の血液を採取して基礎代謝を測定し、その結果、食塩の増加によって基礎代謝が亢進するという事実を確認した。

（同文庫.1991）

ハバロフスク裁判公判書類

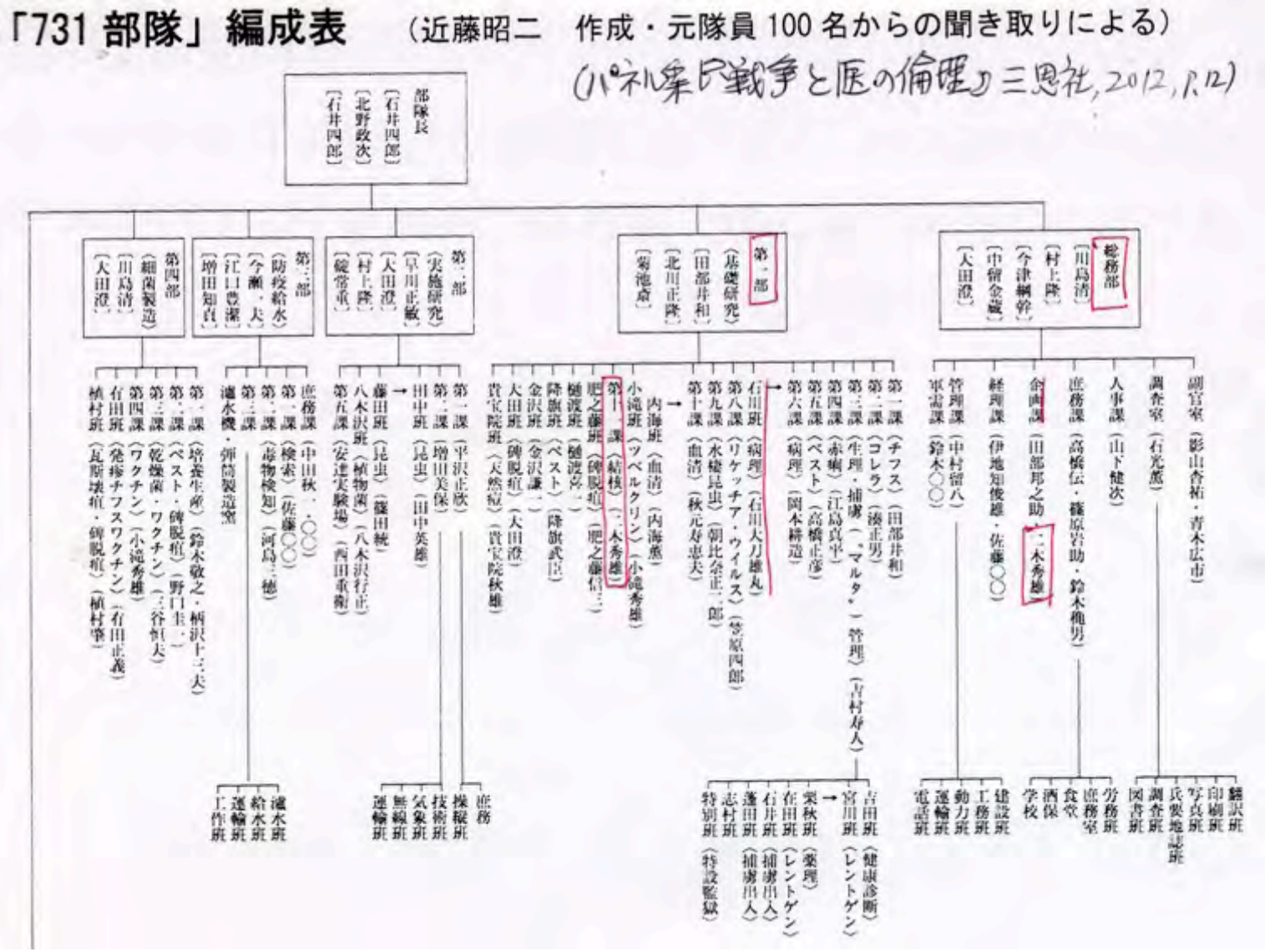
同ジク、安達驛附近ノ實驗場ニ於ケル同様ノ犯罪的實驗ノ參加者タル被告西俊英ハ、次ノ如ク供述シタ――

「……一九四五年一月、私ノ立會イノ下ニ、第七三一部隊安達實驗場ニ於テ、同部隊ノ第二部長樋口佐及ビ同部員二木技師ニヨリ、中國種族十名ニ對スル瓦斯脱疽ノ感染實驗ガ實施サレタ。中國人捕虜ハ、一〇名其一〇―二〇米位ニ柱ニ縛リ付ケラレ、ソノ後電流ニヨッテ爆弾ガ爆破サレタ。其ノ結果、一〇名其、ガス脱疽ヲ以テ汚染セル榴散弾ニヨリ負傷シ、一週間後悶死シタ」（第七册一一三頁）。

虐殺サレタ者ノ死體ハ、第七三一部隊監獄ニ隣接スル特別ノ火葬場デ焼却サレタ。（ハバロフスク裁判公判書類、モスクワ、一九五〇）

事件ニ關シ訊問サレタ證人及ビ被告ハ、拷問場タル第七三一部隊構内監獄ニ「被實驗

二木秀雄＝731部隊総務部企画課長（関東軍と計画立案）、第一部第11科長、結核・性病班長



隠蔽：1945敗戦直後の731部隊と金沢

四高人脈・金沢医大、野間神社仮本部、輿論社

- 8/10 新京で石井四郎・参謀本部朝枝繁春会談「証拠は地球上から永久に隠滅せよ」、マルタ処理・建物爆破焼却
- 8/16石井空路大連・22頃帰国若松町自宅に、直後陸軍省医務局で河辺虎四郎・梅津美治郎・荒尾興功と会談
- 部隊幹部陸路8/20ハルビン・通化・釜山経由帰国、8/25下関・舞鶴上陸、金沢へ（既に43年から標本保存の金沢医大石川太刀雄研究室に資材・資料搬入）
- 増田知貞（金沢1中・4高・京大医・731）大佐帰国「会報」＝「疎開先なき者は金沢に至り増田大佐の指揮を受く」・仮本部長、8/26野口圭一軍医証言「金沢の住人の二木に全部お願い」した（青木『731』）、
- 8月末金沢野間神社に731「仮本部」・太田澄ら約15名1か月常駐、石井も9月上旬金沢に行き終戦処理・対占領軍対策協議

・9/6 二木は広島にも（森村誠一『続　悪魔の飽食』）、10月旬刊『輿論』刊行準備

戦後の金沢文化
―旬刊『輿論』ほか

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

日誌集書

西田国夫が自費出版した『創刊のころ―金沢の戦後雑誌からは』（昭和48）は、『北窓』『文章』『雲国』等の、郷土が生んだ文化雑誌を探索し、戦後の金沢文化の息吹きを生き生きと伝えた労作である。敗戦後の三年ほどは、地方文化が活性化した時期であった。戦局の緊迫につれて、縁故を求めて地方に疎開した中央文化人がこれに参画して行った。

金沢の加能屋書店から、前記の西田の著でも触れている『輿論』（昭和20年11月10日創刊、輿論社）五冊と週刊新聞『サンデイタイムス』（昭和21年2月二五部を得た。『輿論』は戦後金沢で最も早く創刊された雑誌で、「全くの素人揃ひではあるけれども、再建日本には純正なる言論による民意の確立こそ絶対不可決なりとの信念の下、一切の虚飾を避けて、ひたすらに、事実を読者諸賢の机上に呈することを使命」とすると「編集後記」でうたっている。同人はすべて郷里に縁故のある人達ばかりであるとも記している。創刊号は、「進駐軍を語る」特輯のほか、「再建政治のあり方」「原子爆弾を繞る世界最近の動向―平和維持のために」と題する記事や、常設の「敗戦哲学」「国際短波」なるコラムがある。第二号からは、「新生婦人の常識」欄も設けられた。十二月には金沢本社の外、東京・京都・九州・北海道にも支社が置かれた。創刊号以来、大なり小なり原子爆弾に関する記事を取り上げ、国民輿論に訴えているのが特色で、第四号（12月21日）には、被爆地の学術調査班に加わった金沢医大病理学教室石川太刀雄博士の「廿世紀の神話　原子爆弾」が発表された。編集子は（原子爆弾に関する日本否世界最初の学術的啓蒙的原稿）と特筆している。

編集兼発行人は、元金沢医大細菌学の教室で輿論社社長の二木秀雄（創刊号のみ大山公平）である。

『サンデイタイムス』第六号（昭和21年2月3日）では、「学者の天皇制見解」として東大教授の宮沢俊義と横田喜三郎が意見をのべている。宮沢は、（世襲君主制は神秘的信仰で、しかも非合理なところに存在意義がある。……今急速にこの合理化をやると却って軍事的なファシズム等が出てくる可能性があるのではないかといふ見透し）もあり、現段階では天皇制保持が政治的にも有利とした。横田は（儀礼機関）としての天皇制の存続を説くが、天皇制に対する人々の考えが変化しつつあるとの認識をも示した。

金沢発行の雑誌としては、この外、辻豊次の『ヒロバ』（大地社）や三林邦太郎の特ダネ雑誌『ニュース街』（北陸情報社）等もある。

一九四五・八―九（太田『731免責の系譜』）
隠蔽＝金沢仮本部「会報」十項目＝口裏合わせと連絡網作成

自宅とはどこを指すのか。かつて勤務した軍医学校のある東京か、出身地の石川県か。次章で詳説する増田大佐直筆の書簡から、一一月上旬の時点で増田が千葉県内の農家宅に間借りしていたことが確認できるが、尋問前の滞在場所ははっきりしない。

いずれにせよ、尋問録で増田は療養のため「自宅にいた」と説明しているが、この増田の話とは中身の食い違う文書が存在するので紹介したい。それは『会報』と題した手書きの文書で、陸軍の便せん一枚に一〇の項目が箇条書きされている。以下、全文を引用する。

会報

一、増田大佐ハ下関漁港ホームニ事務室ヲ開設シ下関門司ノ上陸ヲ処理ス
二、柴野梯団ハ千崎ニ上陸
三、江口梯団ハ門司ニ上陸
四、鈴木梯団ハ須佐ニ上陸
五、海防艦三ハ門司ニ上陸セリ
六、俸給給料ハ近ク支給ノ見込ナリ
七、各、先般提出セル疎開先名簿ハ各地方別ニ整理シ各二通提出スベシ
八、疎開先ナキ者ハ金沢ニ至リ増田大佐の指揮ヲ受ク
九、将校以下服装ヲ整ヘ威容ヲ損セザル如クスベシ
一〇、家族名簿ノ件

会報からは、部隊が各梯団ごとに山口県の仙崎や須佐、北九州の門司に引き揚げたことや、疎開先別に名簿を作成していたことなどがわかる。牡丹江支部に四二年から終戦まで在籍した沖崎清重元伍長（一九二一年生まれ）がこの文書について、こう解説してくれた。

会報は教育部の元准尉（故人）が持っていた。私は九日の日ソ開戦で本部から「秘密書類とノミを持ってこい」と言われ、牡丹江から本部へ出張していた。（そのまま）牡丹江へは戻れず、准尉が「ワシのとこへ来て仕事を手伝え」と言うので、一四日の最終列車で一緒に部隊を離れた。教育部は資材部長の柴野（金吾）梯団に入り、萩に引き揚げたのは二五日の朝。増田大佐は終戦処理の「本部長」で、石井閣下から命令を受け（各梯団に）伝えていた。会報はそれを准尉が受領筆記したもの。

第１次免責工作＝45.10「あくまで科学研究」

- 米軍サンダース中佐来日、宮川米次と相談し、9/20最初の尋問＝出口三郎・井上隆朝・通訳内藤良一、
- 731部隊は「細菌研究のみ・人体実験なし」「天皇は化学戦に反対」=天皇免責のために1945/9月末「内藤レポート」を元に、G2ウィロビーと共にマッカーサーにも戦犯訴追免責了解を得て、10/1サンダース・新妻清一中佐（原爆調査も）会談・通訳内藤良一「戦争犯罪とは無関係の純科学的調査」、
- 10/2　マッカーサー、天皇免責をフェラーズに命ず、
- 10/9・10/11・10/16　増田知貞・新妻尋問・通訳亀井貫一郎「内容非公表、戦犯無関係、米国はソ連の調査を拒否する」
- 10/29内藤・田中淳雄会談、10/30京都・田中淳雄尋問「ペストノミ」肯定、通訳内藤（ワシントンには報告されず）、
- 11/9新妻・増田会談＝内藤案として「マルタと細菌戦攻撃ペストノミ以外は積極的に開陳すべし」「亀井先生によろしく」

（太田昌克『731免責の系譜』、青木冨貴子『731』、常石敬一他）

金沢・輿論社、二木の旬刊雑誌

『輿論』創刊1945.11.10（石井四郎偽装葬儀日）

1945.11.20

TRADE MARK

Fujiya

文房具
謄寫版

富士屋本店

◎卸販賣……大阪市天王寺区

更新大和全店

新潟店
本社 金沢店
高岡店
富山店
福井店

Department Store DAIWA

編輯後記

輿論社

PUBLIC OPINION

輿論

第二號　昭和二十年十一月二十日發行

内容

社論　天皇制を國民直接投票に決せよ……二
新生……二
終戰前夜御前會議の眞相……三
輿論調査　貴下は如何なる人物を新議會に送らんと欲せらるゝか……六
M中將は語る……七
戰時哲學……八
原子力と將來の産業……九
主食三合配給の即時斷行……一〇
特別寄稿　復員兵士のこと……一二
國際短波……一四
生活科學……一四
新生婦人の常識……一五

1945

輿論社發行

定價五〇錢

天皇制の輿論・国民投票による護持：

米CIC軍人、室伏哲郎(1930生?)、中村静治、越村信三郎、河上肇らも執筆

天皇制の輿論調査發表

ポツダム宣言の受諾、ついで昨年九月二日降服文書の調印により日本の敗戰は完全かつ決定的となり、舊日本の一切はその一つ一つがこくめいに剝ぎとられていつた。國民の好むと好まざるとに不拘それはポツダム宣言を敗戰日本の至上命令として遵奉履行する限り當然のことではあるが、しかし久しきに亘る傳統と國史を根底からひつくり返すことは事實しかく容易なことではない。

天皇制問題に對する國民の論議が他の如何なる問題にもましてその關心を昂めつゝある理由もまたこゝにある。しかも當初主として國民的感情のまゝに考へられたこの問題も時日の推移は逐次國民を啓蒙、かつ冷靜な理性的判斷へと移行せしめつゝあることは極めて注目すべきことであると云はねばならない。本社は嘗に天皇制の直接國民投票による決定を提唱したが、ついで天皇制存否に關する輿論調査を實施、既にその一部を發表したがこゝにその後の數字を公表、あはせて輿論調査研究所の調査をこゝに摘錄して天皇制問題に對する國民輿論の動向を示すこゝとした。

(一) 本社調査

回答總數 二、一三一 (調査數五、〇〇〇)

(1) 天皇制支持 一、九六三 (九二、一%)

イ、現狀のまゝ 九二七 (四七、二%)

ロ、大憲を縮少 四三二 (二一、四%)

ハ、政治の圏外に立ち道德的中心として 六一五 (三一、四%)

(2) 天皇制否定 一二〇 (五、六%)

イ、絶對不可とする 八七 (七二、五%)

ロ、現在必要なるも將來不必要 三三 (二七、五%)

(3) 國民投票の後決定 二一 (一%)

(4) 不明なりとするもの 二七 (一、二%)

(二) 輿論調査研究所調査

回答數 二、三八九

(1) 天皇制支持 二、一八四 (九一、四%)

イ、現狀のまゝ 三八一 (一六%)

ロ、道義的中心として 一、〇八六 (四五、七%)

ハ、政權を議會と共有 六八〇 (二八、一%)

ニ、その他 三七 (一、六%)

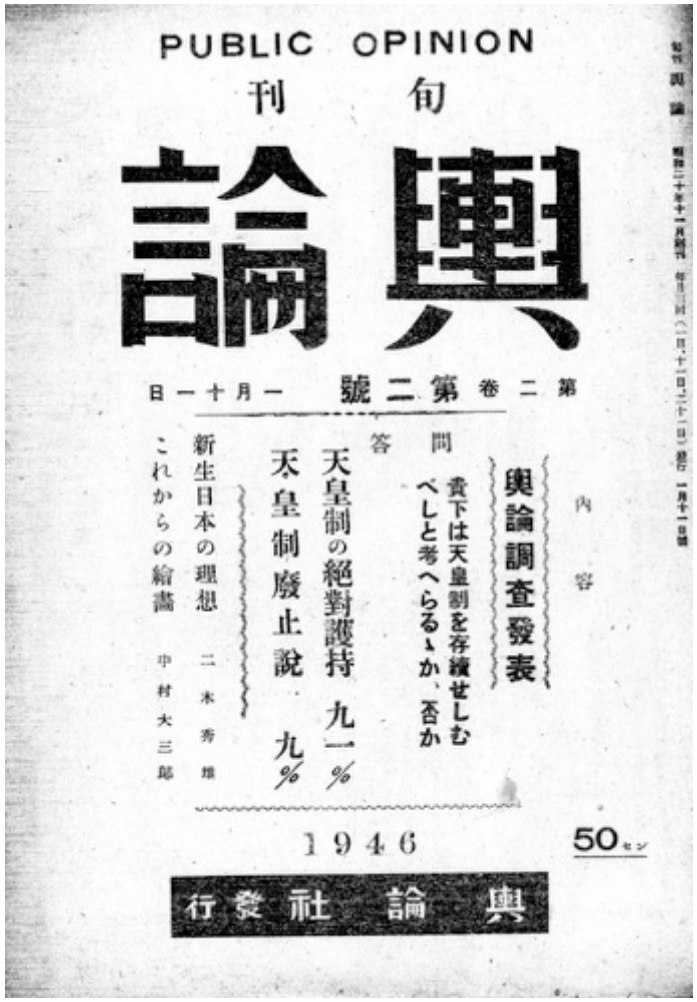
(2) 天皇制反對 二〇五 (八、六%)

イ、大統領制 一三七 (五、七%)

ロ、ソ聯式公選制 六四 (二、七%)

ハ、その他 四 (〇、二%)

(日本輿論史 一九四六年三月号)



PUBLIC OPINION

旬刊

輿論

第二卷 第二號 一月十一日

內容

輿論調査發表

問 貴下は天皇制を存續せしむべしと考へらるゝか、否か

答 天皇制の絶對護持 九一%

天皇制廢止說 九%

新生日本の理想 二木秀雄

これからの繪畫 中村大三郎

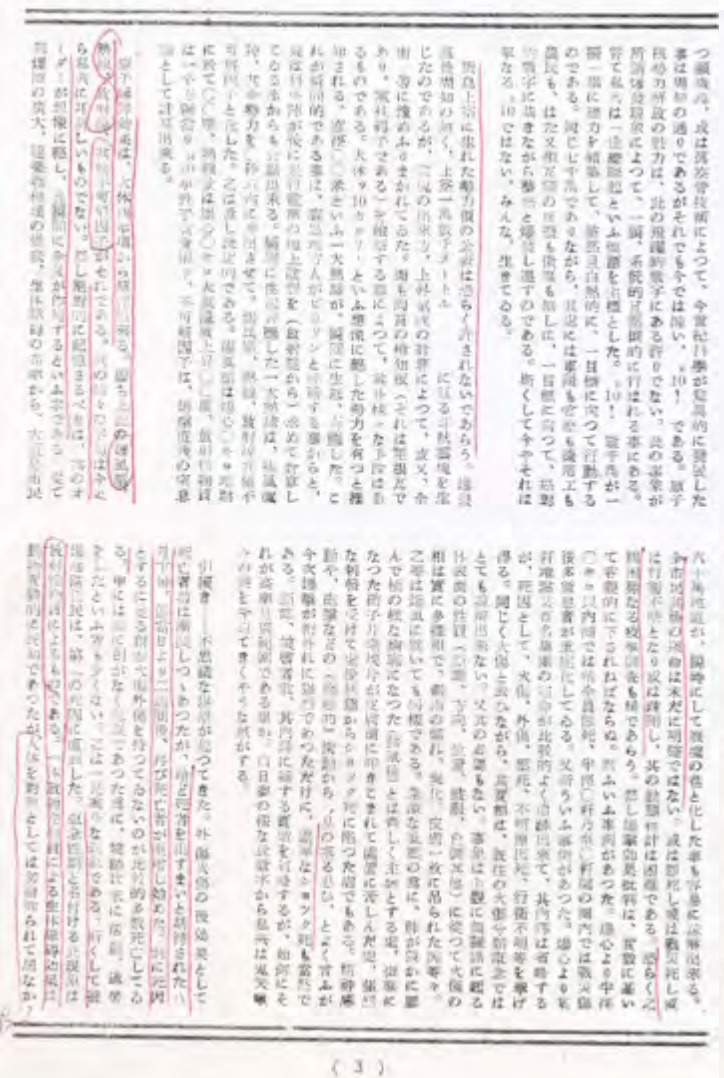
1946

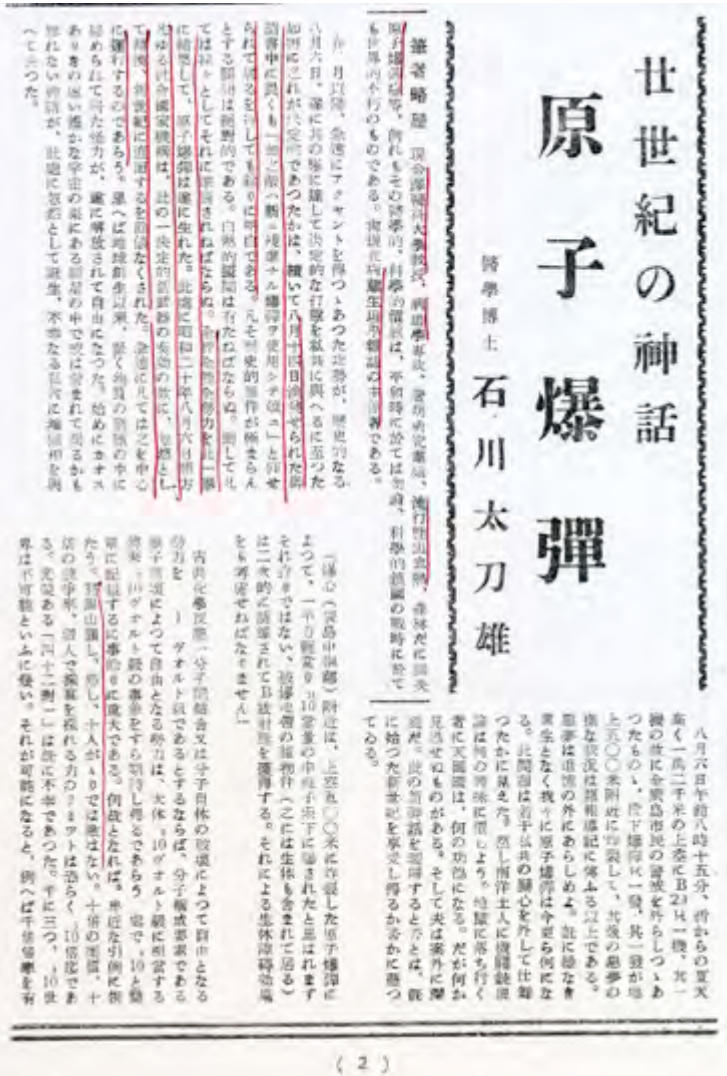
50セン

輿論社發行

731石川太刀雄の原爆論(『輿論』45/12)

＝売り文句「原子爆弾に関する日本否世界最初の学術的・啓蒙的原稿」、「広島は人体実験」「放射能は長期」、二木は「平和・産業利用」(二人共四高、谷友次)





廿世紀の神話

原子爆弾

醫學博士 石川太刀雄

PUBLIC OPINION

輿論

旬刊

第四號 十二月二十一日

内容

現在の高物價で食下は やつてゆける見込がありますか

東京は狂つてる

廿世紀の神話 原子爆弾 石川太刀雄

日本經濟再建の道 中村靜治

1945

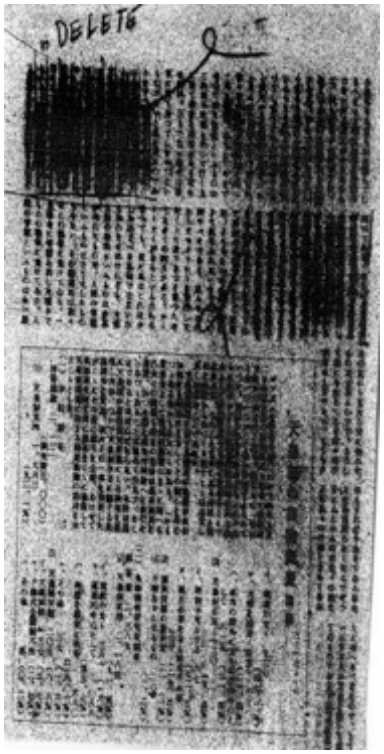
輿論社發行

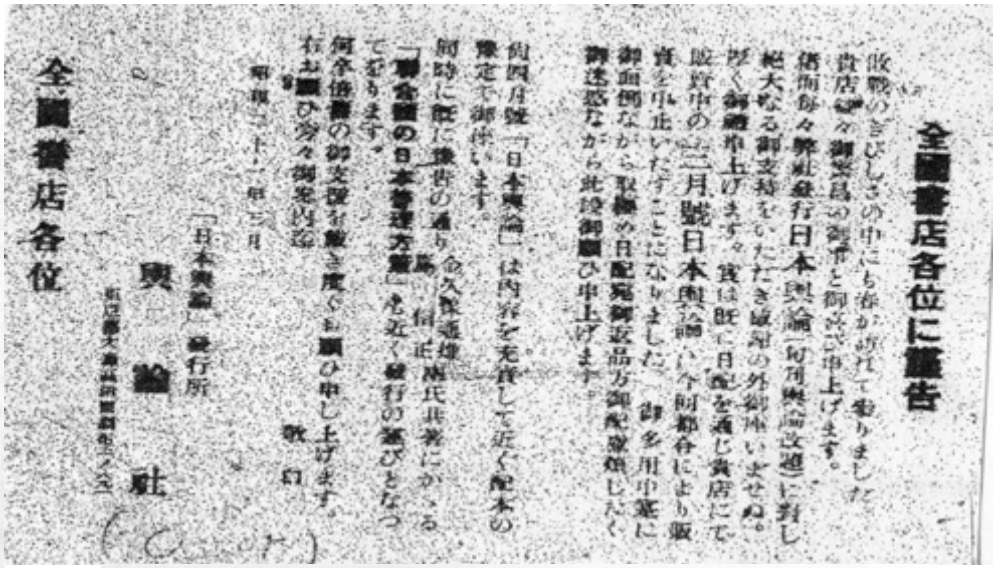
1945.12.21

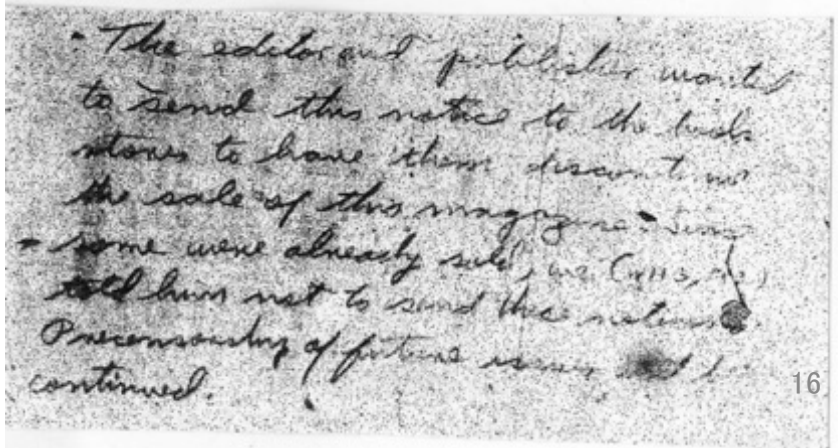
46/3『日本輿論』のCCD検閲対策（『輿論』無）

（『真相』46.3-57.3=14% vs.『政界ジープ』46.8創刊はほぼゼロ）

- **大西芳夫「天皇制に就いて」他7ヵ所** delete、しかし配本後、**「この注意書きは送らせず、将来の事前検閲は続けなければならない」、以後、CCDに目次を英訳して全面協力** (広告：薬・銀行）







第2次免責工作：石井四郎の取引

（米国側動きは、NARA/IWG公開資料 *Researching Japanese War Crimes*,2006, & *Select Documents on Japanese Warcrimes and Japanese Biological Warfare, 1934-2006*

- 1945/11/10千代田村で石井四郎偽装葬儀、
- 11/20石井四郎宅に米軍将校6人招待「サンダースはすぐ帰る」、後に下北沢宮本光一邸でも接待（二木は、この頃金沢で『輿論』創刊）
- 11月末　サンダース軍医中佐の鎌倉亀井貫一郎宅送別会・帰国報告（青木『731』）、
- 12/6　キーナン来日国際検察局IPS設立、12/24共産党志賀義雄より細菌戦情報、年末、石井四郎宅で服部卓四郎歓待？
- 45末-46初？　亀井貫一郎宅で「鎌倉会議?」（常石『医学者たちの組織犯罪』p.67他,米軍と内藤・有末・亀井、石井も出席？ ただし青木『731』はMIS亀井ファイルから47/4説）
- 新妻口裏合せマニュアル「北野中将へ連絡事項」10項目を80通配布[太田p.144,235, カーボンコピーと言うが、ガリ版では？　隊員名簿管理者が二木なら金沢の吉田印刷＝吉田次作から全国配布網通知？ 極東軍事裁判免責確定まで毎月「徒歩連絡要員」給与証言（朝日95/9/19)]、退職金支給説も
- 46/1/7 志賀義雄からの新聞記者情報「米兵捕虜にペスト菌使用」
- 1/8 G2・CISポール・ラッシュ・メモ「石井発見」
- 1/9 北野政次帰国・有末精一訪問「米軍とはもう話がついていて戦犯となることはない」・
- 1/11　GHQトンプソン中佐尋問「生物戦のことは口外しないように」
- 1/16ポール・ラッシュの亀井要注意レポート
- 1/22-2/25　石井四郎尋問、CIS/CCD で石井四郎・細菌戦関係者をウオッチリストに（山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』p.8）、
- 2/26「スター＆ストライブス」紙に石井四郎生存記事、
- 3/5 国際検察局IPSモロウの石井四郎調査をG2が妨害・却下、
- 4/29東京裁判IPS起訴状に天皇も石井四郎も無し、
- 4/30 IPS亀井尋問、
- 5/31　トンプソン報告

一九四五末ー四六初（①サンダース・トンプソン・内藤良一・新妻清一・増田知貞、②亀井貫一郎・河辺虎四郎・有末精三・ウィロビー、③石井四郎・服部卓四郎）

「連絡事項」十項目＝○マルタと「保作」細菌戦ペストノミ使用以外は積極供述・米軍協力・資料提供

⑥「北野中将ヘ連絡事項」

北野中将ヘ連絡事項

一、○及「保作」ハ絶対ニ出サズ
二、関防給ハ石井隊長以下尚在満シアリ
三、増田大佐ハ万難ヲ排シテ単独帰還シ「マ」司令部ヘ出頭セリ
四、関防給ハ総務部長兼第四部長大田、第一部長菊池、第二部長碇、第三部長兼資材部長増田大佐トナリ其他ハ転出又ハ解隊シアリ
五、第一部研究、第二部防疫実施並ニ指導　第三部給水実施並ニ指導及資材修理　第四部製造、資材部資材保管補給ヲ担任シアリ
六、七、八棟ー中央倉庫、田中班ーP研究、八木沢班ー自営農場ニ使用シアリ
七、「保研」ニ関シテハ石井隊長、増田大佐以外ハ総合的ニ知レルモノナシ
研究ハ細分シテ常ニ人ヲ代ヘテ之ニ当ラシメアルヲ以テ他ノ者ハ部分的ニ之ヲ知レルノミナリ　而モ其ノ目的ハ知得シアラザルナラン
八、北野中将在職中「保研」ハ前任者ノ実験ヲ若干追試セル外　積極的ニ研究セズ中止ノ状態ナリ
九、「保研」ハ上司ノ指示ニアラズ　防御研究ノ必要上一部ノモノガ研究セルモノナリ
一〇、北野中将ハ在職中専ラ流行性出血熱ノ研究ニ没頭セリ

（注）B4版の陸軍の便箋一枚に記載。カーボン用紙を使った複製とみられる。なお「増田知貞大佐尋問録」（資料③）の後ろに、こよりで一緒に綴じられていた。作者は不明。

黒幕：亀井貫一郎のG2ウィロビー工作

青木『731』、NARA/MIS亀井ファイル、「談話」731は『亀井評伝』再録版で抹消

45.8.15陸軍特殊研究処理要領「ふ号[風船爆弾]・登戸・731 隠滅」全部に関係

47-50 月1万5千円でG2 Agent?

「亀井貫一郎氏談話速記録」 昭和近代史料研究会 1969

△昭和二十年九月 終戦となる。陸軍の依頼に基き協会として日本陸海軍の開発したる一切の秘密兵器を復元し、米国国防総省担当者に引渡し、研究関係者の戦犯の特免の了解を得る。

連合軍総司令部、SCAP、等に米国占領軍総司令部より協会の存続を認められ、会名を「常民生活科学技術協会」(SCIENTIFIC AND TECHNOLOGICAL ASSISTANCE FOR RESUSCITATION OF COMMON PEOPLES LIVING STANDARD)と改称せしめらる。その理事長たり又 SCAP G2 特別顧問となる。

△昭和二十年十二月 対日賠償案 PAULEY 報告 修正作業に従う。

△昭和二十一年二月 独立社会党を組織す。故郷の思想を普及せんがためなり。

△昭和二十一年四月 逝去、大政翼賛会、東亜部長として「大東亜共栄圏の理念の哲学的構造」としての東亜共同体の思想の創案者、提唱者、指導者たりしもの」との理由による。SCAP G2 の特別顧問

をつくり、外交的に早期終戦の方策をとるべきものとし、山下奏文大将を馬来より転じて関特大演習を指揮せしむることは、ソ連の中立条約破棄を招くものとし、東条首相と数回会談。その後、その意見用いられざるのみならず、軍内、官吏、賛成のものは死地に転出せられたるにつき、七月三十一日、単独にて、演説会を開きて以上の趣を述べたる言葉に基く。

△昭和十八年三月 星野（直樹）内閣書記官長の斡旋により、東条首相よりの招きに応じた。その顧問として、戦争遂行政策を科学技術的に転換することを進言し、その同意を得た。

△昭和十八年五月一日 戦争遂行のため、各国の技術情報を蒐集し、我国朝野科学技術者を動員し、その研究により、企画を立案し、大本営に進言するところの内閣技術院、陸海軍省に協力する機関として、「財団法人産業技術協会」を設立せられることとなり、その理事長に就任す。爾後、専ら、新兵器を開発することと、民間産業を軍需産業に調整することと、中小企業を大企業の正しい系列に導くことと国民の食糧の開発とその保存の技術開発等とに従った。

㋑液体酸素及びその魔法壜（協会自ら造る）。㋺ロケットミサイル、その誘導体は東芝の西巻栄三郎氏と住友電気の梶井剛氏（協力）。㋩風船爆弾、対東亜防疫給水部、石井中将部隊の細菌爆弾及び謀略兵器。ANTHRAX（誘致菌種）開発（協力）。陸軍登戸研のレーザー（いわゆる殺人光線）、（連絡）。特に大阪内正敏博士と共に、東条総理に進言したるは、慰化学研究所の仁科博士、歌人の長岡博士に依頼して原爆乃至、ドイツV2を開発推進することとなりしも、本件は㋺項研に研究開発集中のこととせらる。

△昭和二十年一月 ソ連参戦を見透し、ソ連参戦前に終戦の機をつかむべきことを、岡田前総理等に説く。特に終戦工作は、チャーチルを手がかりとするか、中立友好国、特にスイスを場所として、POLL部隊関係に接触すべきことを説く。前海軍大臣、野村直邦（大将）賛同せるも、岡氏は米内海相を説得し得ず。

たること支障なしとの通報を受く。

元 SCAP より追放除外の内達ありたるも内達を固辞したるによる。

△昭和二十一年四月 日本共産革命計画に対処すべく、PWC（極東委員会）よりMACARTHUR占領軍総司令官に対して与えられある指令58項中の一項「総司令官は、日本国内に於て、政府を転覆せんとする擾乱乃至騒擾が生起したる場合と雖も、占領軍の安全に影響を及ぼさざる限り、これに干渉することを許されない」の改訂作業に着手す。

△昭和二十一年九月 昭和二十二年二月一日を期して、日本共産党指導の下に、ゼネ・ストを行ない、日本革命の予備行動とするの確実なる情報に基き、之が対策の作業に着手す。

△昭和二十一年十月 前項の対策とし、(1) 政不敬、広汎なる左翼分子の、PCIC(追放)を除去し (2) 右、革命予備行動に反対する労働組合に精神的又物質的なる支援を与うることとし (3) 前項の各組合にの関係約財政援助として、占領軍の押収せる日本

「陸軍省軍事課特殊研究処理要領」と標題のあるこの文書は、陸軍省軍事課が終戦と同時に関係機関に発した通達である。短いものなので以下全文を引用する。

97 第二章 七三一部隊をめぐる米・ソの確執

特殊研究処理要領 軍事課

二〇・八・一五

一、方針

敵ニ証拠ヲ得ラル、事ヲ不利トスル特殊研究ハ全テ証拠ヲ隠滅スル如ク至急処置ス

一、実施要領

1 ふ号、及登戸関係ハ兵本草刈中佐ニ要旨ヲ伝達直ニ処置ス（十五日八時三十分）

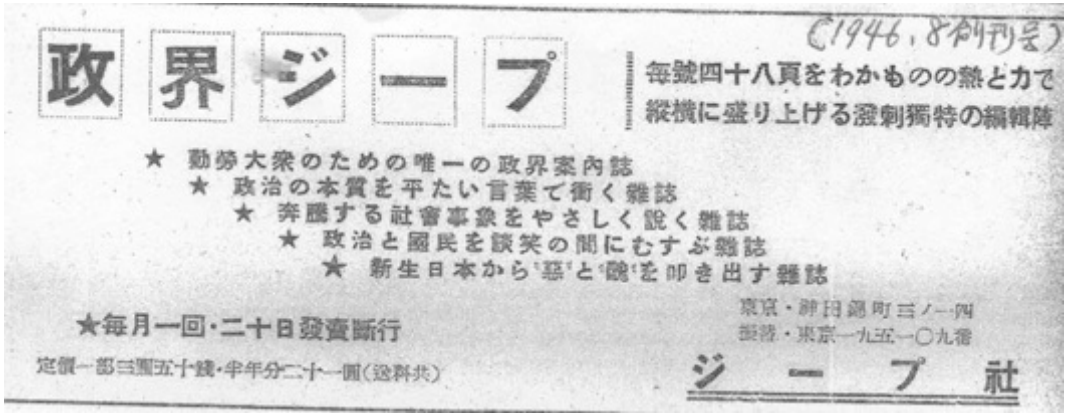
2 関東軍、七三一部隊及一〇〇部隊ノ件 関東軍藤井参謀ニ電話ニテ連絡処置ス（本川参謀不在）

3 櫛林本廠1号ハ衣糧課主任者（渡辺大尉）ニ連絡処理セシム（十五日九時三十分）

4 医事関係主任者ヲ招置直ニ要旨ヲ伝達処置ヲ小野寺少佐及山出中佐ニ連絡ス（九時三〇分）

5 獣医関係、関係主任者ヲ招置直ニ要旨ヲ伝達ス土江中佐ニ連絡済（他ハ書類ノミ）一〇時

1946.8 二木秀雄上京：ジープ社時局雑誌『政界ジープ』創刊（not カストリ、not 右翼「厳正中立・万年野党」）vs.『真相』46.3-57.3


(1946.8創刊号)

政界ジープ

毎號四十八頁をわかものの熱と力で縦横に盛り上げる溌剌獨特の編輯陣

★ 勤勞大衆のための唯一の政界案内誌
★ 政治の本質を平たい言葉で衝く雑誌
★ 奔騰する社會事象をやさしく説く雑誌
★ 政治と國民を談笑の間にむすぶ雑誌
★ 新生日本から"惡"と"醜"を叩き出す雑誌

★毎月一回・二十日發賣斷行

定價一部三圓五十錢・半年分二十一圓（送料共）

東京・神田錦町三ノ一四
振替・東京一九五一〇九番

ジープ社

- 1946・9「女の子にもわかる大衆の政治誌」「小粒でピリッとした政界裏面誌」
- 1948・9「今では政治の民主化の旗手として全国10万読者[プランゲでは5万]」「わが国唯一の大衆政治誌、政界浄化のために闘う政界ジープ、勇敢に真実を語る政界ジープ」「断然類誌を圧倒、躍進、特ダネ満載」
- 1949・8「ある権威ある調査で、総合雑誌は文藝春秋、婦人雑誌主婦の友、文芸雑誌小説新潮、政治時局雑誌では政界ジープが上半期最も売れた雑誌」
- 1950・3「ジープ社社長・松山清一郎を詐称し金銭強要は当社と関係なし 」
- 1950・9創刊5周年「総合雑誌でも娯楽雑誌でもない流動型時局雑誌、戦後続々現れたいわゆる時局雑誌の多くはすでに影を消したが、今日残っているレポートにしろ真相にせよ旋風にしろ例外なく、その内容は別として、企画の立て方から編集の組み方まで、いちばん早く発足した本誌のスタイルをまねてスタートした」
- 1952・4「我が国唯一の大衆政治誌」復刊、1955・9創刊十周年「政財界の裏面誌」

アクセルを踏む前に
——はつかんのことば——

○雨を歩いてゐるとジープの波である。ジープはみたところ軽快で、丈夫さうである。どこへでも、山でも坂でも、ぬかるみでも、何なく突破してゆけそうである。そしてスピードもある。戦車や大砲に比べたらさしみのつまの様でもあるが、なくてはならぬものゝ様でもある。小粒で手柄だがピリッとしてゐる。日本の様な狭い場所には、うってつけの「足」である。

○「政界ジープ」は、ジープで表象される雑誌として生れた。自由、民主といふ白粉をつけた言論が、昔のデパートの十銭ストアみたいに、色さまざまのよそほひをとらして本屋の店さきにヘンランしてゐる。「政界ジープ」も、おそまきながら、その中の一つに加えて貰つたわけである。とらえる事柄は、せまい政界ではなくて、幅の広い人民の政界である。表からも、裏からも、横からも、縦からも上からも、下からも、そして時々は表からも、裏からとしたアスファルト道路をゆく様に駆けまはつてみる積りである。現象の裏に一体何がかくれてゐるのだらうか？　案外フタをめくつてみたら何の変てつもない「人間」が顔を出してきさうである。考へてゐるのもつくつてゐるのも、腹をすかせてゐるのも、恋をしてゐるのも、人間である。男と女と、としよりと子供と夫と妻と、働く者と、その上前をはねるものと、搾取するもの、されるもの、その又記事を拾ふもの、みんな人間にちがひはない。この人、人、人、の世の中を、ムヤミ、ヤタラにはしりまはつたら迷惑するものもあるだらうが、喜ぶものもある事だらう。

○軽るやかなジープも、近代科学文明のエキスである様に、「政界ジープ」も、新しい科学的世界観が、一本のスヂを通してゐる積りである。日本、世界、地球、宇宙と並べてみると、狭い様でもあり、広い様でもあり、小さい様でもあり、大きい様でもある。まあ監視出来るとすればとかく日本はせまく、封建的であるが、世界となると、広くて民主的である様な気がする、がしかし何となく平面的である。ところが地球といふことになると、立体的となつて更に宇宙といふと、第五次元のものをさへ考へさせられる。点から線に平面から立体に、水平から垂直に、有形から無形に、狭から広に、欠乏から充足に、すべてが創造されつゝある。無数の生物の中で、只一つ垂直性の発達を、かちえたものは人間であるが、その歴史も、体験も、科学も、道具も、みな立つことによつて発展した大脳の所産に他ならない様である。

○ジープは近代アメリカ文明の最頂点の一つのあらはれである様に、人間現象の頂点は、せまい宮殿内ではあるが、すべてを綜合したり、制断したり、そして常に動揺してゐる大脳につきるといはねばなるまい。そのせまい中ながらも充実した脳細胞や、脳実質内では、豊かな、無限ともおもはれる程の、思想や、感情が、あらはれては消える。「政界ジープ」は是であるとともに頭脳である。つまり一つの「人間」である。（二木）

編輯後記

▲政界ごとは言ふまいと思ふが、出版界よりなほみると偽だと計、穴だらけでなんとも情ない。雷鳴の雲霧ごみにも尚らず、何がどうしてかうなつたか、相撲界一国、いまや倒になつて反河してゐる。人事を尽して天命を待つ、といつた心ホンまでもれないところに、何か割り切れぬ、歯痒の思ひまん感じてゐる。政界ごとはこれつきり、と心にきめて、こんどはあつさり完なぬいておかう。

▲本誌の編輯方針については、上欄に述べてゐるところにつきる。皆しに言ふことが通りくどいとおぼしめすなら別冊現実の、あくどいばかりの我がままの演出を見給へといけう。幅快と安楽がジープにおいて相立するやうに、酒相と清廉が本誌の歩命だと思つてゐる。

▲それにつけても、本誌が貴々編輯者だけの所産であつては何の意味もない。願ふところは大衆のもの、それ故にこそ、大方識者の真に次の書ない御意見がほしい、しきりにほしい。それから表情に溢れた創撰現も。

▲政界に、いまだ海のものとも山のものともわもぬ渉たる本誌に、玉稿を寄せることによつて、曲りなりにも給出の裏城を思ふさま味はして下さつた諸先生と、「おい一貴様」の者様は笑いが、何ぐれと厚い別にふれて関係なく見てくれた友人記者諸君に、心からの感謝を申し上げたい。一信しみなく愛は奪ふ」といふが、ぼくらはいま、問だらけの子なぶりて、たゞわけもなく嬉しいといふことなが正直に告白しておかう（K生）

政界ジープ　創刊號
定價三圓五十錢
昭和二十一年八月一日發行
編輯兼發行人　二木秀雄
印刷人　吉田次作
印刷所　吉田印刷所
發行所　ジープ社
東京都神田區三ノ一四
郵替東京一九五一〇九番
出版協會會員番號
A二二一〇二一二
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

初期の『政界ジープ』とジープ社出版物

＝GHQに忠実・親米、「逆コース」に照応し右傾化・反共暴露雑誌化

1946・8創刊号　尾崎行雄「新日本建設の基点」、鈴木安蔵「勝利のために一民主戦線の展望」、井汲卓一「津田左右吉の天皇論」、阿部真之助「官僚論」、丸山幹治「幣原から吉田へ」、松谷天光光「わたしの議会日誌」、二木「発刊のことば：新しい科学的世界観、ジープは近代アメリカ文明の最頂点の一つのあらわれ、総合判断の頭脳」

（ジープ社初単行本『連合国の日本管理方策』）

1946・9＜「女の子にもわかる大衆の政治誌」「小粒でピリッとした政界裏面誌」＞　長谷川如是閑「象徴の諸相」、高橋正雄「割れた人民戦線」、永田徹「心と心のつながらぬ憲法論議」、高倉テル「議事堂という所」、細迫兼光「大山郁夫氏に寄せて」、原比呂志「揺らぐ保守陣営」（広告自社「孫悟空」「連合国の日本管理政策」、山之内製薬・広瀬サーベイジ、印刷金沢吉田印刷所）

1946・12（プランゲ欠）斉藤隆夫「議会壇上の反軍闘争」、浜口雄彦「父を語る」、末川博「河上肇博士」、中西功「尾崎さんの想い出」、森厳「いつまで続く吉田内閣」、竹原信太「吹きまくる嵐―教壇を追われる教授陣」,「学生の政治運動」、横山隆一（広告：ゼネラル衛生濾水器、黄土社、理研ビタミン、凍傷治療剤タペシリン）

1947・10　吉田茂「野党の心境」、栗山良夫「保守反動の意味は」、小坂善太郎「三代目談義」、並木芳雄「農村青年の文化」、岡崎勝男「降伏軍使マニラの旅」、秋月潤「政界謎の黒幕・辻嘉六を裸にする」、山崎道子「私は私の道を行く」、永村仁吾「西尾狐・平野狸の一騎打ち」、近藤日出造

（単行本　二木秀雄『政界ニューフェース』ジープ社刊行）

1948・9・25特別政治情報第一号　「再開された娘の身売り」、「政界は濁りきった底なし沼」、「飛行機丸かじり、石油がぶ飲み、廃兵器どこへ流れた」（裸の女性が初めて表紙に）「わが国唯一の大衆政治誌、政界浄化のために闘う政界ジープ、勇敢に真実を語る政界ジープ」「断然類誌を圧倒、躍進、特ダネ満載」

1948・10特集第二号「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」犬養健・尾崎未亡人インタビュー、「謎を包む札束のカーテン：昭和電工事件」、「根絶されぬ桃色興業」

1949・5　佐野学・三田村四郎「わが反共宣言」、神山茂夫「裏切り者の論理」、志田義光「リュシコフ大将の末路」、「玄洋社と黒龍会」、「裸形の銀座」、徳川夢声、佐藤達夫、荒垣秀雄、与謝野秀、座談会「政治と科学」、二木秀雄「素粒子堂雑記：原子力は人類を滅亡せしめるか、それとも平和的・建設的に用いられ新しい文明の創造者になるか」連載開始（前号鳥尾夫人について事実誤認おわび、本紙記者上田君一身上の理由で退社今後一切関係ありません、雑誌5種商標登録）

1949・11　「政治家の奥さん」、「女ボス」、「ハバロフスク将官特別収容所」、「白足袋を追って」加藤芳郎、横山泰三、阿部誠「悲劇の海底空母――パナマ運河奇襲計画の全貌」（綜合科学研究会「若き人々におくる性生活展」厚生省・文部省後援、浅草松屋）

1949・12（プランゲ検閲終了）「政界に渦巻く恋と謀略」、「大磯の土曜夫人」、殖田俊吉「わが反軍闘争」、「心霊術の正体」、（待望の巨弾『経済ジープ』創刊11月５日発行）

「大会社続々製薬業へ、ボロ儲けのクスリ商売、一役買う厚生省」

第3次免責合意：47.4「鎌倉（亀井宅）会議」9項目密約

石井部隊の研究者たちは、以下の九項目の条件をのんで、執筆にかかったことになる。

1. この秘密調査報告書の閲覧はフェル博士、マックェール中佐、および吉橋通訳とGHQのアメリカ人、そして石井と約二〇名の研究者のみに限定されている。
2. 日本人研究者は戦犯の訴追から絶対的な保護を受けることになる。
3. 報告はロシア人に対しては全く秘密にされ、アメリカ人のみに提供される。
4. ソ連の訴追及びそのような（戦犯を問う）行動に対しては、絶対的な保護を受けるものである。
5. 報告書は一般に公表されない。
6. 研究者はアメリカ合衆国の保護下にあるという事実が明らかにされないよう注意が払われる。
7. 主要な研究者は米国へ行くことを許可される。
8. 細菌戦実験室が作られ、必要な経費が支給される。しかし、アメリカ人実験室長の下に行われる日本人研究者との共同研究はさらに考慮される。研究に基づく特別実験が予定される。
9. アメリカ人だけによる全面的な共同研究は日本の問題に良い影響を与える。

アメリカ人とこれらの条件を決定するに当り、8以外はすべてアメリカ人の一般的意図に基づく。

亀井による「九ヵ条の密約」が交わされたのが「鎌倉会議」であり、細菌戦実験を担当した二〇名が鎌倉で記した報告こそ、六〇頁に及ぶ英文の「一九人の医者による（人体実験）リポート」だった。第二章で紹介した陸軍軍医学校卒の浅見淳軍医のインタビューテープのなかにも、以下の言葉が残されている。

「増田（知貞）というのは内地へ帰ってから、鎌倉のホテルに軟禁されて、アメリカに（情報を）提供した」

この尋問記録のなかで興味深いのは、参謀二部が亀井を信用していなかった事実である。エージェントの応答は以下に続く。

「東京と鎌倉で報告書を作成中、亀井は秘密報告の本文に直接介入すること、及び、試験のためという理由で報告書を石井のところへ届けることを禁止された。彼の仕事は日本人研究者の世話をすることに限られた。報告書はフェル博士とマックェール中佐によって直接石井に届けられた。石井隊長の報告は亀井を飛び越してGHQのドレーク少佐に手渡された」

ドレーク少佐というのは、参謀二部のマックェール中佐の後任である。石井の報告書

1947/1/7 ソ連検察局がIPSに石井尋問要求、

1/15 米ソ協議・柄澤十三夫供述提出

1/24 米国法務局スミス中尉内藤良一喚問・人体実験供述

4/8亀井報告「日本における共産主義者の活動」、

4/17G2ウィロビー将軍介入「米国国益上の国家機密」なので法務局調査中止へ（3/14.8/29亀井のウィロビー宛て書簡から青木『731』は47年からG2Agent月１万５千円、加藤の解読では17 March 1950文書で月２万円の情報提供Agent)

4/21フェル亀井貫一郎尋問

4/28内藤・金田・増田尋問対ソ連対策、この頃「鎌倉会議」9箇条密約、

5/18-9　米軍石井尋問、

5/15-6/13　ソ連側石井尋問（４日間）

6/24フェル報告、二木訊問

6/24病理標本8000枚等データ（石川太刀雄ら）米国へ

11/28亀井軍服詐欺で逮捕

（辻嘉六隠退蔵物資事件の一環、以後G2エージェント？）

12/21　ヒル・ヴィクター報告「費用25万円は安かった」、二木の人体実験データ報告を含む

隠蔽・免責から復権へ＝PHWと予研、極東軍事裁判ソ連訊問要求、帝銀事件・日本脳炎

1948/1/26帝銀事件発生・731 部隊関係者も捜査対象、4/13 警視庁に「専門家」として二木秀雄助言協力「本当に青酸カリが出たのか（安価で入手容易な青酸ソーダ・ナトリウムではないか）」、同日宮本光一も「731のほかに北京1855部隊・南京1644部隊も」と捜査協力、4/24増田知貞、4/27石井四郎、青酸化合物人体実験関係者16人名簿提出

8/3G2歴史課有末精三・服部卓四郎から警視庁へGHQの731 関係者捜査中止の「意向」伝達

8/21平沢貞通逮捕

（常石『謀略のクロスロード―帝銀事件捜査と731部隊』日本評論社、2002)

Cf.8月九大米兵生体解剖事件5名死刑判決（「731は対ソ戦のため」として免責）

GHQ/PHW(公衆衛生福祉局)の公衆衛生政策、特に感染症対策

・サムズ准将の医療・福祉改革と厚生省再編、防疫対策が急務（サムズが46.11伝研田宮猛雄らに発疹チフス囚人人体実験指示、米軍406研に協力、高杉晋吾『731部隊　細菌戦の医師を追え』徳間書店、1982,p.69. 竹前栄二『DDT革命』岩波1986、武見太郎証言)

・米原爆傷害調査団（ABCC）に石川太刀雄、緒方富雄ら早くから協力（二木も9.6広島、YMCA『天よりの声』東京トリビューン社1949刊行で栗原貞子「生ましめんかな」普及→放射線影響研）

・結核世界最高で死亡率一位、45–46 天然痘（死者3千）・発疹チフス(死者3千）・梅毒（性病40万）、48日本脳炎（死者2千）、48予防接種法、BCG接種法、ウィルス研究・ワクチン開発と強制投与、これらに731関係者登用

・47予研分離、小林六造（防疫研）・小島三郎（栄1644）、福見秀雄（防疫研）らワクチン開発で復権、福見は予研第6代所長・長崎大学学長（CIA福見file)

＜原子力と似る感染症研究の軍事利用と平和利用＞

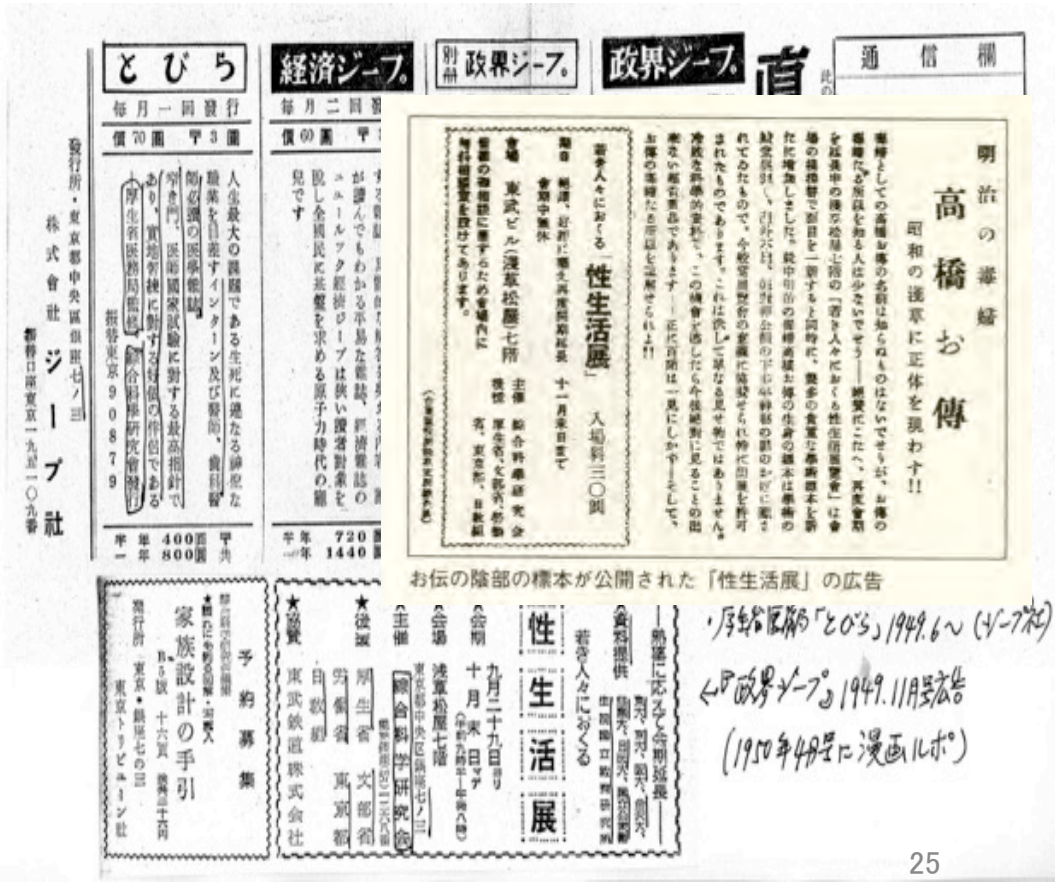
第１次復権：厚生省医務局監修・綜合科学研究会発行『とびら』『医学のとびら』ジープ社

1949.6-51厚生省医務局監修・総合科学研究会『医学のとびら』刊行

- 「インターン生の雑誌、医師の国家試験の狭き門をくぐる全国幾千の同行に対しささやかな道しるべを与えることこれ本誌創刊の趣旨である」
- 連載執筆者に二木秀雄・石川太刀雄・緒方富雄ら
- 広告は大手医薬医療機器企業

49浅草松屋「若き人々におくる性生活展（綜合科学研究会、厚生省・日教組後援、高橋お伝標本展示、32清野謙次「阿伝陰部考」、大橋義輝『毒婦伝説』）

49.10『別冊政界ジープ：受胎調節特集』戸田正三京大教授



お伝の陰部の標本が公開された「性生活展」の広告

『政界ジープ』の右旋回・反共化:『真相』との対抗

1950・3法　別冊政界ジープ特集3号 「おどり出た　新興宗教」、大宅壮一「明治・大正・昭和新興宗教の全貌」、赤岩栄「インチキ宗教はなぜはびこるか」,武藤富男「銭函をひっくり返したキリスト」、「新興宗教に希望す」

1950・4法　ハバロフスク裁判「赤色裁判の恐怖、拷問のカラクリ、細菌戦裁判の実相を暗示する被告元少佐唐沢富雄のメモ　731は検事の誘導尋問による反米でっち上げ裁判・引き揚げ問題の煙幕」、「性生活展探訪;問題の高橋お伝特陳室 」

1950・8法 「創刊5周年記念特集」「極東コミンフォルムの地下組織　G(デレヴィアンコ)機関とF(福本和夫)機関を暴く」「50年テーゼを生んだ革命指令」「共産党非合法化の前夜を探る」、「スターリン・吉田茂　架空対談」、「講話問題で稼ぎまくる岩波グループ」、「恐るべきソ連の拷問技術」、「国共合作秘話　共産革命の立役者ボロジンと語る」、大宅壮一「学生運動の史的回想」、「イールズ事件後の学生運動」<「真相」50・4月号731特集・二村秀雄経歴暴露への反撃>

1950・9　政界ジープ臨時増刊「戦争、日本はどうなる」、われわれの生活はどうなる、ソ連はいつ攻勢に転ずるか、ソ連果たして原爆を使うか、世紀の運命を決定する水爆の威力、日本国防軍は再建されるか、米国は日本を見捨てない、「戦禍の朝鮮」、「アジアの焦点横須賀基地」、二木秀雄「原爆戦か、ゲリラ戦か一意外なのは米軍の苦戦、ゲリラ戦がかなりの役割」(1951年7月から52年3月まで一時休刊)

1952・6国 「国会お好み十人衆」、「総理大臣逮捕すべからず」。「政界動物園」、「マニラの鼓動」、「日本貞操ジャングル」、連載小説「石原完爾」(発行:ジープ新社　仁藤直哉)、「200万円大懸賞　衆議院解散は何年何月何日何時何分か」、二木秀雄「鮎川義介氏の闘志」

1953・4　総選挙特集号「馬鹿野郎解散断行」「総理の椅子をめぐる激動」、「東亜連盟と石原構想」、「同胞三万五千を救った話――中共引き揚げ問題」、「吉田打倒、冬期労働ストの実相」(二木の選挙応援、「精魂社」から発行)

1954・9 「疑獄化する砂糖事件」、「東邦生命の詐欺事件」、「映画監督を監督する」、「東京予備校横領事件」、「暴かれた加州銀行の乱脈」

1955・3国 「鳩山早期引退、今や必要」、「粛正すべき東邦生命のスキャンダル」、「疑獄化する砂糖事件」、「一万田蔵相と選挙資金」、「口に国産化を唱え専ら外車愛用の国会族」、「伏魔殿林野庁に再びメス」→1956/3　政界ジープ恐喝事件

(ジープ社社長　清水隆英、常務・編集局長　久保俊広＝陸軍中野学校出身、後に大物総会屋、他にも記者から総会屋・黒幕輩出)

第2次復権：1950日本ブラッドバンク創設，731幹部同窓会「精魂会(社)」結成

内藤良一・二木秀雄・宮本光一＋神戸銀行他(ミドリ十字、薬害エイズへ)

たまたま、1950年の初夏、数年来音信の絶えた旧友、アルミニウム加工工業の社長の故宮本光一氏と、医者でありながら政治経済の評論雑誌をやっていた二木秀雄氏の２人が突然来訪されたので、京都嵐山の料亭に招いて回旧談をやっているうちに、話が私の夢話になり、この２名の戦後派実業家たちは早速にも『いっちょやるか』ということになってしまいました。宮本氏は顔の広い実業家で、神戸銀行や三和銀行の主脳と親交がありました。

事業目論見書が浄書プリントされ、宮本氏の手で両銀行に提出されました。８月になって、神戸銀行の小林副頭取（現ミドリ十字取締役会長）のもとへ宮本氏に連れられて出頭、説明申し上げる機会を得まして、数日後には『出発進行』のお許しが出、小林副頭取と宮本氏と間で会社設立発起人の人選が行なわれました。それは元三和銀行頭取で、政界に出て国務大臣の職にある園野清豪氏、神戸銀行頭取園崎忠氏、同副頭取小林芳夫氏、三和銀行副頭取渡辺忠雄氏、同元常務田分政次郎氏、元大阪日赤病院長前田松苗氏、宮本光一氏、二木秀雄氏という約錚たる顔振れでありました。

かねて、事の進行を話していた友人の内田俊吉弁護士が、当時失業中の柳幸氏を事務幹部として推せんしてくれたのはまことにオンタイムでありました。私の住居が仮事務所となって色々な文書の作製を急ぎ、大阪の一流料亭『なだ万』で発起人会が開かれました。柳氏の事務はまことに鮮やかでソツがなく遂行し、11月20日と決められた創立総会に向って進みました。小林副頭取は発起人総代の役を引き受けられたのみならず、みずから大蔵省や日本銀行の上層部に赴いて説明に当られ、愛知銀行局長（後の蔵相、外相）とは社名の相談までして下さいました。私は厚生省やマッカーサー司令部を歩きまわって了解工作をやりました。このときの担当官は、Dr. Bozeman という文官で、懇切な指導と、日本政府（厚生省）に向ってのプッシュをやって下さいましたが、私としても、もう忘れかけていた英語をつかっての体当りは相当しんどい仕事でありました。このような事業は国営や公営でなく、民間企業とすることが国家社会のためになる――と説かれ、そのことが今日のミドリ十字の25年間の運命を決定したと思います。(Dr. Bozeman は程なくマッカーサー司令部を去られ、故国に帰って Pitman-Moore Inc. に技術担当役員として入社、タイバンからグロブリン

①ジープ社最盛期：単行本396冊＝49年までは年数冊、親米・反共・ハウツーもの『これがアメリカ』『アメリカ留学ノート』『私は毛沢東の女秘書でした』『アメリカにおける共産主義者 の陰謀』等々）

②PHW文書内藤「日本血液銀行企画草案」に石井の名、ブラッドバンク株主に内藤・二木・宮本のほか石川太刀雄・谷友次・太田澄・野口圭一・星野隆一、波多野林一・佐島敬愛ら、朝鮮戦争で米軍と結び乾燥人血漿で巨大利益、56北野政次 が東京プラント所長（『ミドリ十字30年史』1980）、二木は50/51取締役

③1950頃731上級幹部同窓会「精魂会」結成、55「懇心平等万霊供養塔」（大半は二木出資）、他に元少年隊員「房友会」、航空班員「波空会」、体育会系「東郷会誌」、東大系は「同心会」等＝二木が名簿管理、1956名簿187人（近藤昭二氏提供）、1966名簿234人、1973名簿に242人（日韓『資料細菌戦』晩聲社1977付録、高杉晋吾、毎日新聞)

④ただし二木は53.4参院選石川地方区立候補落選（当選井村徳二53改進新210442、次点林屋亀次郎66無所属現194279の大和・武蔵決戦のはざまで、二木秀雄45無所属新は12447で惨敗）、この53年3–4月号『政界ジープ』は精魂社発行。

日本ブラッドバンク企画草案

「石井四郎」名明記（太田『系譜』）

この草案は厚生省やGHQへ提出されたものである。石井は三千人を超すとされるマルタを使った人体実験、中国での細菌戦争、アメリカへの細菌攻撃計画と一連の重大戦犯行為を取り仕切った名実ともの最高責任者である。内藤らの工作で部隊の免責が確定していた後とはいえ、GHQの説明資料にあえて石井の名前を特記する必要などないはずだ。軍医のなかでも「ピカ一」の頭脳をもつと言われた内藤。行間に潜む彼の狙いはなんなのか。

企画草案の「むすび」の前章に「企業政治」という項がある。そのなかで内藤は「どんな企業も多少の政治力を伴わねばならない」と指摘したうえ、次の点について政官界への働きかけが必要と主張している。

① 国内各種機関に血液銀行組織をもつよう奨励する
② 全国の保健所が災害救急用に乾燥血漿を常備できるよう予算措置させる
③ 失業者や貧困者からの血液供給を抑制する法令が成立するのを防ぐ
④ 製品のダンピングを防ぐ
⑤ 特殊な事業なので法人税を免除させる
⑥ GHQ方面の理解、指導および援助を得る

あくまで私企業として国内初の血液銀行を立ち上げるとしながらも、予算措置や税制、法制化という「公」の権限を巧妙に利用し、大きく儲けようという内藤のしたたかさが伝わってくる。企業

として行うべきロビー活動の方向性がここに凝縮されている。

そして問題なのが⑥の「GHQ方面の理解、指導および援助」だ。この部分にこそ内藤があえて「上官は石井四郎」と明記した意図が隠されているのではないだろうか。

細菌戦ネットワークの中心人物だった内藤をはじめ、部隊中堅幹部の二木、さらには石井のパトロン宮本と、この血液銀行構想に関与する部隊関係者は、本来なら戦犯となってもなんら不思議のない人物ばかりである。ところが、終戦直後の内藤の工作や人体実験データの取引で、部隊幹部、関係者はこの時点で軒並み戦犯免責されていた。

しかしそうはいっても、この企画草案が書かれた五〇年七月はまだ占領期間中である。五〇年六月の朝鮮戦争勃発で明確に「逆コース」が取られ始めていたとはいえ、GHQの意向しだいでは、内藤ら部隊関係者の処遇などどうにでもなる時代なのだ。血液銀行の開業に必要なのは厚生省の認可だが、GHQのさじ加減ひとつで構想すべてが水泡に帰す。したがって潜在的な戦犯容疑者の内藤らにしてみれば、血液銀行の事業認可をめぐりGHQの首を縦に振らせるだけでなく、戦後の表社会を公然と歩むための〝担保〟が必要だった。

そこで、あえて「石井四郎」という名前を文章として残すことで、GHQに対し過去の戦犯免責付与の事実関係を再確認する。またそうしたかたちで事業認可を得ることで、免責の事実をよりいっそう動かしがたいものとする。さらには、アメリカと取り引きした石井四郎の名前をもち出すことで、「こちらはすべて事情を知っている」とGHQに脅しをかけ、事業認可をスムーズに行わせるという思惑があったのではないか。

1949末ソ連ハバロフスク裁判報道：雑誌『真相』50.4の二木秀雄ら731経歴暴露と、『政界ジープ』の反撃

(朝日1950.2 は「ソ連が天皇裁判要求、米英拒否」の黙殺報道)

- 生きたまま凍った足や腕をメスで鋸で切りとった(マルタ、吉村寿人の凍傷実験)、医師たちは凄惨な実験を見るなり逃げて帰った(清野謙次、石川太刀雄丸、笠原四郎、吉村寿人、岡本耕造、田部井和、林一郎ら関西医学界中枢、「政界ジープ」の二木秀雄は変わり種)、
- 実験に供されたという「満州猿」なる動物はいったい何か？(「満州猿」解剖の世界記録を持つ石川太刀雄、二木秀雄、笠原四郎ら、北野政次)

第3次復権：1952.4細菌戦・原爆の開き直り

『政界ジープ』1950・4　中山参吉「天皇戦犯の震源を衝く：スターリンの一弾は徳球天皇の胸板を貫く、ソ連が共産主義を深く浸透させる陰謀」「赤色裁判の恐怖、拷問のカラクリ、細菌戦裁判の実相を暗示する被告元少佐唐沢[柄沢]富雄のメモ、731はソ連検事の誘導尋問による反米でっち上げ裁判・引き揚げ問題の煙幕」、

1950・8「暴力のペン振るう人民社の機密室：代々木本部と訣別した独立共産党――『真相』追放の真相、仮面をかぶった左翼商業主義、光クラブも顔負け、真相株主人名簿、日共の外郭機関、告訴によって太る、恐るべきスパイ政策」[日本共産党は50年分裂で佐和慶太郎『真相』を切り捨て、81『悪魔の飽食』まで731 解明のチャンスを逸す]

1952.4 山本容（二木？　石川？）「細菌戦物語：**もしもペスト菌を培養された25億匹の蚤が地球の上に振りまかれたら、人類は一挙に破滅する**」「原爆都市戦と細菌ゲリラ戦の組み合わせこそ現代最強の武器」→Atoms for Peace

恐るべき細菌戦

もしも、ペスト菌を培養された二十五億匹の蚤が、地球の上に降り撒れたら……人類は一挙に滅亡する。そんなバカな話が……と思う人は本文を熟読されよ。

地球の上に蚤が降る

―細菌戦物語―

山本容

△蚤も兵器▽

△細菌は弾丸▽

△細菌戦の防禦▽

△原子戦と細菌戦▽

△細菌戦の方法▽

1953.4石川県衆参内灘射撃場選挙

- 1953年4月、ジープ社社主二木秀雄は、郷里の金沢で、参院選石川地方区に立候補した。前年52年10月総選挙で、石川県出身旧大本営参謀、「潜行3千里」の辻政信が、晴れて戦犯を免がれ「反米反共」を掲げて立候補、衆院石川一区「辻旋風」でトップ当選した。それが半年後には吉田茂の「バカヤロー解散」で、53年4月の衆参ダブル選挙になり、衆院石川1区は東亜連盟・旧軍人組織に支えられた辻政信が2位で再選された。

しかしこの4月ダブル選挙の石川県での天王山は、参院選地方区の方だった。参院議員で現職国務大臣の林屋亀次郎が、吉田内閣の米軍内灘射撃場誘致の説得役になったため、保守勢力の中でも内灘射撃場反対の声が高まり、金沢の財界番長会を代表する対抗馬、改進党の井村徳二に、社会党・共産党や労働組合までが支持にまわり、僅差だが井村が現職大臣林屋を破り、当選した。衆院の辻政信も、「反米自衛」の独自の立場から、内灘基地誘致には反対して反対集会にも出席した。（井村は勁草書房社長寿二の父、井村喜代子も父の応援演説、中村静治のルポ）

この選挙前後の内灘米軍射撃場反対闘争は、砂川闘争など後の反米軍基地闘争のさきがけで、清水幾太郎が反対の論陣を張り、五木寛之が『内灘夫人』の舞台として描いた。全国的にも注目された選挙で現職大臣林屋19万票を井村21万票が上回り、米軍基地反対派が勝利した（愛国統一戦線）。内灘選挙戦に割って入った第3の候補者が、金沢医大出身で東京の出版社社長二木秀雄だったが、実際には1万2千票しかとれない泡沫候補に終わった。当時の『政界ジープ』の論調や新聞報道などを見ると、衆院辻政信の強固な支持層である東亜連盟・旧軍人票の受け皿を狙ったが、二木は731部隊の軍歴を使えなかったため、一部医師会等の狭い支持に終わった。辻と同じく米軍射撃場反対を唱え、井村の票を割ろうとしたが果たせなかった。背後に鳩山一郎・益谷秀次を見る説もある。

この選挙での敗北が、二木秀雄『政界ジープ』の大企業・大銀行恐喝雑誌化（石川では加州銀行スキャンダル）、久保俊廣ら総会屋輩出への転換点になった。また社名を「精魂社」と称して、731同窓会「精魂会」に引き継がれる。

1956.3.15 二木秀雄の転落：政界ジープ事件

「一流会社や銀行、政治家などのスキャンダルや暴露記事をネタにした野村證券・神戸銀行等恐喝で『政界ジープ』を摘発、14人を逮捕。19件の犯行で被害総額は6960万円（東京地裁立件6435万円）。戦後最大の恐喝事件」、高橋お伝標本はジープ社ビルゴミ箱で発見

55.7（731 精魂塔建立時）『政界ジープ』

編集人：常務・久保俊広（陸軍中野学校→『国会ニュース』、産経リサーチ、『今も生きているテキ屋』）

発行人：社長・清水隆英（→政財界ジープ社）

東京本社・大阪支社・4総局・12支局・1通信部体制

●記者たちは「裏社会」へ（伊藤博敏『黒幕』小学館）

小野田修二『月刊ペン』『ドキュメント総会屋』『広告王国』

大橋一隆『マスコミ時代』東電総会屋担当、石原崩記

本田二郎「平和相銀事件」小宮山英蔵秘書、石原俊介

五島徳二郎　宝石商、右翼・殉国青年隊顧問

日本弁護士連合会から感謝状

政界ジープ編集局、支局

二木元社長も逮捕

「政界ジープ」脅カツ事件

「政界ジープ」に手入れ

社長ら七人を逮捕

政・財界・知名人を脅す

大阪支社も捜索

1960年代の二木秀雄：内藤・北野の「ミドリ十字」、清水隆英の政財界ジープ社『政界ジープ』、陸軍中野学校出身久保俊広の『国会ニュース』(総会屋へ)には加わらず診療所医師？

（↓『朝日』1964.12.24） 66上林山栄吉防衛庁長官公私混同事件・国会審議、66年地裁懲役6年求刑、69年最高裁懲役3年判決確定、病気で収監されず黒幕に

二木に懲役六年求刑

「政界ジープ」の会社恐かつ事件

戦没者よ安らかに

少年を使って盗み

「錦政会幹部」らを逮捕

二木秀雄 in『人事興信録』

の第一七版(昭28)までなし

② 第一八版(昭32)～第二〇版(昭34)

二木　秀雄　医学博士　石川県出身　[総精魂社社長]
明治四十一年二月十日に生る金沢医大を卒業す
東京都大田区田園調布四ノ三一九　電七二局二八四

③ 第二一版(昭36)～第二八版(昭50)

住所は変わるが、内容は同じ

二木　秀雄（ひでお）　医学博士　[開業医]（二木[総精魂]所長）
石川県出身　東京都大田区在籍

母　キン　明12 4 6生
妻　あい子　明45 1 12生
次女　桂子　昭13 1 2生
長男　徹　昭15 9 14生
三女　昭子　昭19 10 4生
四女　和子　昭23 1 1生

明治四十一年二月十日生る昭和八年金沢医大卒業
同十三年「家兎神経系微細解剖の組織学検索」により学位を受く[「素粒子営雑記」(週スポーツ)]
[東京都中央区銀座西二ノ一　電五六一局一九四〇]
「医院」同上

④ 第二九版(昭52)以降なし

医師・仏教徒・二木秀雄の晩生：懲りない74末ムスリム入信：日本イスラム教団

イスラムのホームページ Islamic website in Japan

円柱亭（日本イスラム教団）

私が約十年間、マレーシア、エジプト、リビアと留学していた間に、日本イスラム界では、シャオキー二木秀雄氏率いる日本イスラム教団が突如現れ、一世風靡した。その活躍ぶりは海外へもニュースとなって届いてきていた。残念ながら、留学期間中、私はわずかに結婚報告とハッジビザ申請に帰国したくらいで、結局日本イスラム教団の方と一度も接触することはないまま、留学を終え帰国した。その後も接触のないまま、二木氏の他界により日本イスラム教団の名前は聞かなくなり、今日に至った。一世風靡した日本イスラム教団とはどういう団体だったのか、今となっては調べようにも、意外と資料が残されていない。ところが、今年になって『円柱亭日記・・・町医者"円柱"と闘う』という書籍を手に入れた。目を通してみると、当時の日本イスラム教団の様子が描かれたものをいくつか発見した。後の人に残すためにも、それらを紹介しておこう。

まずは巻頭にあった写真のなかから、次に当時の円柱亭の様子がよく描かれている荻野須美子の『風ぎを吹く風のように』を全文紹介しておこう。その他の投稿も若干載せておこう。

『円柱亭日記・・・町医者"円柱"と闘う』
昭和56年6月20日発行、定価1500円、監修：二木秀雄、発行者：宗教法人日本イスラム教団、製作：さきたま出版会
東京都新宿区新宿3-21-6　龍生堂ビル7F　電話03-350-6961

在りし日の日本イスラム教団写真

円柱亭で会員に囲まれるシャオキー二木氏（中央）と二木氏のサイン。

- ・「アッラーのほかに神はなし」「ムハンマドは預言者である」の二聖句の念誦により、何人もムスリムになり、ついでイスラームの道をゆっくりと登り詰めることによって何人も救済にあずかる「大乗イスラーム」で、5年間で5万人の信徒を獲得（ 1981 東京イスラム国際セミナー）
- ・シャオキ二木は、無免許の医師で新宿にクリニックを開いてイスラムをダーワ、石油ショックで財界や政界とも太いパイプが出来て、アラブ産油国からも莫大な資金を叩き出した。ムスリムの公称信者数はクリニックの患者の数を公称信者数にしたと言われている。石油ショックでは信者数が増加した。

ある意味、日本の新興宗教団体的な方法で急成長、インドネシアに学校や病院も建設して、一躍海外でも有名となるが、日本イスラム教団が右翼団体のオイルマネー狙いの団体として、二木に黒い噂が出る。石油ショックが終わり、二木の強引な手法で信徒が離れ、やがて、教団が消滅した。

- ・脈打つイスラーム新潮流--この目で見た激動中東　二木 秀雄　月刊自由民主 / 自由民主党 編 (通号 294) 1980-07
- ・"イスラム復権"への私見--一日本人ムスリムとして考える　二木 秀雄　自由 / 「自由」編集委員会 編 23(7) 1981-07
- ・日本におけるイスラームの新潮流　二木 秀雄　自由 / 「自由」編集委員会 編 23(11) 1981-

二木秀雄の大乗イスラム

80・7『自由民主』、81・7←11『自由』寄稿

81・8国際イスラム会議 81・11森村『悪魔の飽食』

"イスラム復権"への私見

―日本人ムスリムとして考える―

東西両陣営の対立抗争から独立した第三世界を中東諸国は築こうとしている。この地域の人々の心のなかに生きるイスラム教の理解のために!!

二木秀雄
日本イスラム教団 総政・医学博士

1974.12

をことごとく捕え、投獄したが、フセイニだけは辛うじて追手の手を逃れた。この時、フセイニを匿ったのが、在チヘラン日本大使館であった。

フセイニは二ヵ月ほど日本大使館に滞在、英気を養ったあとで、偽パスポートを持ち、変装してトルコに脱出した。当時は既に第二次世界大戦の最中である。ドイツと、同盟国のイタリアはトルコに進出していたため、脱出したフセイニはトルコのイスタンブールに着くと、あとはドイツ軍の手で無事に、ドイツ首都ベルリンに亡命

私がムスリム（イスラム教徒）になった理由

さて、私がいかにしてムスリムになり、日本イスラム教団を組織するに至ったかを述べておかねばなるまい。

昭和四十九年十二月二十九日、小雨の降る寒い朝、私が東京代々木にあるモスク（イスラム礼拝堂）で入信式をあげた時は、たった四人の同志がいるのみであった。以来、六年余が経った。この間に宗教法人としての正式認可をとり、同志も約五万人にふくれあがってきた。実は、この急成長ぶりが、イスラム諸国が競って私を招請する動機になり、私が自ら訪問する際の大歓迎ぶりを呼び起こしているのであろうと思われる。

私がイスラムへ入信し、布教を始めると、これまで日本でイスラムを研究し、あるいは信奉していた古い人たちが、必死になって中傷と攻撃をしかけてきた。いわば、私の日本人として、現時点に立っての教義解釈を、精神主義、教条主義の立場から排除しようと試みたのであろう。しかし、私の布教方針と教義解釈は結果として、世界イスラム会議の責任ある人々から、王室関係者を含めて、同意と認証をかち得たのである。

つまり、私が身をもって体験し、身をもって信者をふやし、身をもって世界のムスリム（イスラム教徒）の指導的人々と懇談を重ね、推進してきたイスラム布教活動は、今や私個人の方針ではなく、まったく公認のものとなっているのだ。

そもそもイスラム教は、アッラーを宇宙の唯一絶対神、創造者、支配者とする。アッラーは形がなく、画像すらない。つまり、アッラーは宇宙律、自然律、換言すれば、真理なのである。その唯一絶対神の前に、ゼロにも等しい微粒子にすぎない人間、われを自覚するところからイスラムの教義は始まるのである。いわば、科学的なのだ。

日本人のイスラム認識によく見られるように、豚を食べないとか、妻を四人まで持てるとかは、砂漠の民族の千数百年前の生活規範だけをとらえている誤解なのである。

もっとも、こうした誤解は、日本人の専売特許ではない。古くからイスラムと深い接触を持っているヨーロッパでも同じであったし、現在でも、真にイスラムを理解しているかどうかといえば、疑問が残るのである。中世ヨーロッパでは、イスラム教徒とは、キリスト教会をモスクに変えてしまう狂信的異教徒と考えられていた。十九世紀のフランスの有名な歴史家、ジョーゼフ・ルナンは「イスラムは砂漠から生まれた宗教である」といったために、これが誤解されたまま広く世界に流布されてしまった。それ以前にも、フランスの有名な啓蒙主義者、ヴォルテールは「狂信主義―預言者ムハンマド」という劇を書いている。また、ある画家は「ハーレムで女奴隷と過ごすトルコ人」という絵を描き、酒色にふける堕落したイスラム教徒のイメージを広めてしまったりしている。こうした「狂信的イスラム教徒」のイメージは現在でも色濃く残っているといってよく、日本や西欧のイメージには、宗教的、政治的、経済的誤解を幾重にも重ねて存在している。

こうした誤解をとくことが、われわれの重大な使命だが、実は、イスラムは、宗教と世俗という両面のすべてにおいて、一つに合わさった生き方そのものなのである。したがって、信仰の姿勢であり、法そのものであり、文化・文明そのものである。とすれば、家族生活の方法であり、同時に相続、衣服、食卓、衛生などを規定するものであり、精神的、人間的全体性を持ったものなのである。

こうしたイスラム教は、実は、日本人が二千六百有余年も持ち続けている生活様式、あるいは精神とまったく同じものなのである。すべてイスラム的生活様式そのものだ。したがって、一億二千万人の動勉な日本人、すなわち"大和民族"は、潜在的なムスリムだと思っている。布教方針は、実にここにあるといっても過言でない。本当か、と疑問に思う人も多いだろうから、一つ例をあげてみよ